

# 桐が谷通信

CHUBU GAKUIN UNIVERSITY  
CHUBU GAKUIN COLLEGE

第 6 1 号 2 0 2 0 年 9 月 2 5 日

発行 中部学院大学 宗教委員会  
中部学院大学短期大学部

〒501-3993  
岐阜県関市桐ヶ丘二丁目1番地 TEL (0575) 24-2211

## 創立記念日を迎えて

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。

ヨハネによる福音書 3 : 16

高木 総平 (本学院宗教総主事)

5月14日は、本学、中部学院大学の開学記念日であり、例年創立記念チャペルとして礼拝を守っていますが、今年は新型コロナの影響で放送礼拝としてこの日を覚えて話をしました。この日は、創立者片桐龍子先生の誕生日でもあります。特に今年は先生の生誕130年に当たる年でもあります。この国で、多くのキリスト教主義の女学校が女性の自立を目指し設立されたのはこの誕生日前後でありました。その龍子先生が、異なる立場ではありましたが、女性の自立を目指し、学校を設立されていたこと、その学校がやがてキリスト教主義の新しい歩みを始めたこと、不思議な導きを覚えます。このような日に改めて本学が立つキリスト教主義において大切なことは何か考えてみたいと思います。人間にとりまして根源的な問いは、この私に存在する価値があるのかという問いであります。日本人は周り比べて自分の価値を判断すると言われていました。またこの産業社会では、バリバリ仕事ができ、お金を一杯儲ける人が価値があるのだと思われがちです。

今回のコロナウイルスの感染では、日本人のあり方や価値観が大きく問われています。もちろん仕事で成果をあげるとか、学生さんでいうと学習やスポーツで成果を出すことは必要ですし、大切なことです。でもその成果への評価で、人間としての価値がはかられたらいかがでしょうか。バリバリ仕事ができるの方が人間として価値があるとすれば、病気や障害で働けない人、寝たきりの人は価値がないということになってきます。元気な皆さんだっただけでやがてはそうなる可能性もあるのです。

では聖書、キリスト教の人間観はどうでしょうか。それは、人間は存在しているだけで価値があるのだ、一人一人がそのままで大切にされているのだということです。今日の聖書では、この世、私たちを丸ごと

と、ダメな部分や嫌な部分を持っている私たちを丸ごと受け入れてくださっているということを言っています。キリスト教学校はそこから出発しています。創立記念日にはそのことを考え自覚するときなのです。この学院は戦前戦後を通じて困難な時代がありました。戦前はキリスト教主義の学校ではありませんでしたが、今から思うとずっと神様に見守られ支えられてきたのだと強く思います。皆さんもその中にいるということです。「神を畏れることは知識のはじめである」その神を敬愛し(礼拝)その神に聞いて生きるということです。自分たちの力だけでは生きていないという謙虚な姿勢です。それは神がキリストにあって人間を愛してくださったように、私たちも他者を愛するということです。片桐龍子先生も当時の困難にある女性の自立や成長を目指し学校を運営されていましたし、戦後孝先生によってキリスト教主義になったということはよりそのことが明確になったということです。私たちはそのような大きな御手の中で学校生活を送っているのだということです。

それは、苦しいことつらいときにも支えられているのだということです。特に今の時代その時にどんな人生を送るのか、その神様から見てどうなのだろうか。そんな視点を持ち続けていただきたいと思えます。



片桐 龍子 先生



片桐 孝 先生

本来ならイースターの時期にチャペルで話していただくことになっていたものをここに掲載します。またこの奨励は大学 HP にも掲載しています。

### トマス、ハブられる

柳本伸良 (日本基督教団 華陽教会牧師 本学非常勤講師)

十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

ヨハネによる福音書 20:24～29

「ハブられる」って言葉を知らない人は、もうあまりいないですよ。いわゆる村八分状態、一人だけ仲間外れにされる。みんなから無視され、ものごとを共有されず、どんどん孤立してしまう。学生の皆さんも自分がそうならないか、ときどき不安になりませんか？

自分だけ LINE の連絡が届かない。自分だけ遊びに誘ってもらえない。自分だけがいけないとき、周りが盛り上がっている。私一人、みんなと違う状況。私のみ、置いていかれる状態。こんな一度でも経験したら、色々信じられなくなりますよね？

幸か不幸か、今は新型コロナの影響で学校に集まることができず、教室の中、サークルの中でハブられる状況は起きにくくなっています。ところが今、大学に籍を置いている皆さんは、ある意味、社会からハブられる事態になりました。

授業が受けられない、遊びにも行けない、友達と会えないどころか作れない、あるいは国に帰れない、実家から出られない人もいるでしょう。しかし、ありがたいことに、今はネットの時代です。離れていても、SNS やビデオチャットでつながることができます。中部学院でも、ネットによる遠隔授業が計画されています。

大丈夫、若い皆さんは何とかなる……そう言いたいところですが、実際はこの状況に置いていかれる人たちが後を絶ちません。SNS が苦手な人、パソコンを使いこなせない人、あるいは、遠隔授業を受けるにしても、日本に来たばかりで言葉の壁を感じている人。

他の人が LINE やディスコードで盛り上がり、話題を共有する中で、自分は一人でニュースを聞き、一人で課題に取り組んで、一人で一日を終えていく。誰かと交わることもなく、誰かが助けることもない。孤独で寂しい一週間……このまま友達もできないで、授業もついていけないで、自分の大学生活は終わりを迎えてしまうのか？

何で今、直接的な出会いや助けを必要とする私には、その機会が与えられないのか……せっかくイースターを迎えたのに、神の子が復活したとかいう、めでたい時期を迎えたのに、私にはその実感が伴わない。だって、喜びを共有できないから。私だけ、つながりがもたらされないから。

この状況、誰かともものすごく似ています。そう、死んだはずのイエス様が弟子たちの家に現れたとき、一人だけそこにいなかったトマスと同じ。自分だけ、イエス様と出会えなかった。自分だけ、喜びを、話題を分かち合えなかった。

これってイエス様に嫌われたから？ 敢えて私がいけないとき、みんなの前に現れた？ ハブられることに敏感な私たちも、トマスに思いを重ねます。私のことはどうでもよくて、見向きもされないんだろうか？ このまま置き去りにされるのか？

口々に「イエス様 came」と話す弟子たちに、思わずトマスはこう言います。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない」

この気持ち、分かりますかね？……分かりますよね？……イエス様が現れたとき、家にいなかったあなたが悪い！ そう言われている気分です。自宅待機になったとき、パソコンの前に座れない私は、スマホの操作もできない私は、見向きもされない者なんですか？

社会にも学校にも置いていかれた。同期のみんなに置いていかれた。それこそ特別なことが起きなければ、誰かが私とつながってくれなければ、

私はもう、こんなところにいられない！ みんなと一緒に生活できない！

トマスの要求は、自分とイエス様の距離を知るための非常に切実な叫びです。近くであなたを見させてください！ 自分の傷口に触らせるほど、心許していると言ってください！ 彼の言葉は自分勝手だなんて言えません。愛する者とのつながりを切実に望む叫びです。

そんな彼に対し、イエス様はすぐ会いに来てくれるのか？ いえいえ、なんと再会するまで8日もかかってしまいます。一週間放って置かれたことが不憫です。この8日間ってすごく長かったですよね。いったいいつ新型コロナは収束するのか、先が見えない私たちのようです。

しかし、確かにイエス様はやって来ました。それも今回は明らかにトマスのためです。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい」

あなたの要求を実現するため、あなたの願いを叶えるために、私はここにやって来た。無視されていると思った願い、聞かれていないと思った訴えも、私はちゃんと聞いている。あなたも共に喜びなさい！

実は、新型コロナが広がる前から、自宅待機を

命じられる前から、大学の中で「置いていかれた人たち」は、ずっと存在していました。授業に出たくても体を壊して、心を病んで出られない。実家の事情、経済的事情で、急に学校へ行けなくなる。そんな人たちが何人もいました。

何とかして、みんなと同じ授業を受けたい。学校の誰かにつながりたい。だけど、決められた日、決められた時間に教室という場にいない私は、きっと見向きもされないだろう……そう思っていた人たちに、この騒動をきっかけにして、学院から、新しいつながりがもたらされようとしています。

こうなるまで、長い時間がかかりました。8日なんてもんじゃありません。8週間、あるいは8ヶ月待った人もいるかもしれません。今まで、連日大学へ行くことができなかった人たちに、ようやくその時がもたらされました。この閉塞感漂う毎日に、実は喜びも、もたらされようとしています。

そう、イエス様は、たった1人で泣いていたマグダラのマリアに、たった2人でエマオに向かっていた弟子たちに、たった1人信じていなかったトマスに、復活した姿を見せに来ました。3日かかろうが、7日かかろうが、それからさらに8日かかろうが、イエス様は必ずあなたに会いに来ます。あなたにもその訪れが、喜びが、見えてきますように。

### ドキュメンタリー 「樹海の上、浮き漂うわが心」

2018 オランダ放送局

DVD を視聴して

本学宗教主事 高木 総平

長年、福岡、愛媛、京都のいのちの電話に関わり、ボランティア相談員の研修や組織の運営の責任を負ってきたことや愛媛県の自殺予防の評価委員を務めてきたこともあり、自死（自殺）の問題にずっと取り組んできました。そのような体験を抱える中、本学が中心となり活動してきた「岐阜生と死を考える会」で関の大禅寺住職、根本紹徹（本名一徹）先生のお話を聞くことができ、とても大きなインパクトが与えられました。そこで、今年度の宗教講演会にぜひ先生をお呼びしたいと思い、計画を立てていました。先生も快諾してくださり、心待ちにしておりましたが、新型コロナの影響で断念いたしました。でも、先生からオランダのテレビ局が制作し、先生のお働きを取り上げた映像を紹介していただき、早速購入し、宗教委員長全員が視聴しました。ここに委員3人の感想を

掲載します。

「いのちの電話」は「自殺をはじめとして人生の様々な危機の中にある人たちに電話を通して寄り添い、お支えすること」を目指しています。いろいろな社会状況がその根底にあると思いますが、この日本では1998年から14年間、年間の自殺者が3万人を越え、異常事態でした。その後は2万人台で推移していますが、「自殺大国」であることに変わりありませんし、今回のコロナのことで増加していると考えられます。そのような中で、自殺念慮者や未遂者の人たちとつながり、支える活動をされている根本先生から多くの大切なことを教えられました。

このDVDを見て新たに教えられたり、「わが意を得たり」という思いを抱くことが何度もありました。先生は子どもの頃から、親戚の方の自死、友人たちの自死を経験してこられ、人間はなぜそのように死ぬのかを問い続けてこられました。そのような問いから出家されたということです。そ

ここで、「お互いに助け合う」ことを目指し、SNSで未遂の人たちとつながるとともに、電話相談もされ睡眠時間を削り、多くの人たちの苦しみと共に戦ってこられました。また直接かかわることも続けられ、このDVDには、根本先生に支えられ、想像を絶する苦悩にもかかわらず、前向きに生きている人たちが数人登場します。そのお一人お一人からも教えられます。

ここで特に教えられたことの中には、いのちの電話で言われていることに通じることも多々ありました。それを紹介いたします。まず死のうとする人が特別な変な人、弱い人ではないということです。家族関係や人間関係で苦悩し、時には精神障がいになり、生きるのがとてもつらくなった人たちです。そこで死にたいという気持ちが起こりますが、それは「生きたい」との叫びでもあります。これもいのちの電話で特に教えられたことです。ということは、統計の人数からもそうですが、誰でも死にたくなることは起こるということです。苦しみや死を避けようとする現代社会です。そのような中で「死にたい」となると、自分はおかしいと思いつめて、不眠にもなり、ますます自分を追い込んでしまいます。孤独感にも襲われます。

その時気軽に相談できる人がいたら大きな救いです。お寺のある自然豊かなところで、話（気持ち）を聴いてくれる先生に支えられ、自分を見つめ、本来の自分、ありのままの自分を見つけること、それが先生が日々されていることです。特に教えられますのは、「助けて」と言えること、それを受け止める人がいるということです。時にはそのような存在がいても気づかないことがあるのです。また先生のお言葉で興味深いのは、「過去は変えることができる」というものです。先生の背後には仏様がいて、そこから悩める人と同じ目線で、「最強」の素人集団としてお互いを支え合うことを目指しておられます。また当然のことながら禅やお寺での自分を見つめるワークショップを開き、様々な活動から、現代の自殺を生み出すような多くの人の価値観、人間観に挑戦されています。この姿から私共、キリスト教や教会も教えられること多々あります。

私たちもこの地域で地についた活動をされてる先生との交流から、もっと学ばせていただきたいと願います。関心のある方々はこのDVDは総務にあります。お貸ししますので、どうぞ視聴なさってください。

---

### Stories of Life after Limbo

看護リハビリテーション学部  
理学療法学科 講師  
西 中 川 剛

この長編ドキュメンタリーの注目すべき一つは、映像を作成した監督が外国人であることだ。ヨーロッパを拠点とする南アフリカ生まれの監督の目を通して作られた映像の世界は、「何気ない日本の四季はとても美しいんだよ」と伝えてくるようであった。

その中で、ひとりの禅僧を通して生死に向き合う3人の姿が描かれていた。タイトルの副題で、

“Stories of Life after Limbo”とあるが、直訳すると「リンボのあとに生きる話」となる。“Limbo”とは、縁を意味するラテン語の limbus に由来し、キリスト教では地獄と天国との中間にある靈魂の住む場所をいう。また、聖書には明確に語られていないが、新約外典に詳述されているイエス・キリスト伝中の説話で、キリストは埋葬と復活の間に“Limbo”に降り、彼が人々を救い出して、天国に連れのぼるとされている。

この作品は仏教をどこかキリスト教と重ね合わせ、魂を失い生死の狭間にあった人たちが美しい世界の中で生の美しさを再発見しながら変化する姿にメッセージを込めているのだと感じた。

---

### 対話を通した寄り添い

中部学院大学短期大学部  
幼児教育学科 助教  
小 室 明 久

本作は岐阜県関市の「大禅寺」住職根本一徹氏のもとに訪れた人々を描いたドキュメンタリーである。訪れた人達は様々な背景を抱えている。ドキュメンタリーの中でカメラに向かって、それぞれの人は抱えている辛さや悲しさ、どうしても

ない蟠りを語りかける。

根本一徹氏是对話を通してその蟠りをほぐしていく。氏は生き難いと感じている人は自分らしさが分からなくなっていると言う。辛さや悲しさを取り除くのではなく、寄り添い、ただ訪れた人に向き合っていく。それぞれの人が抱える事情は特別なものではなく、誰もがふとした瞬間に経験し得るものではないだろうか。来訪した人が自分自身と向き合う機会を氏が共に見出していく姿が印象的である。